

第三話

1. 多摩川からの灌漑水の取り入れ口

多摩川からの取水路の特徴を2～3の事例で示す。これによって玉川上水の地形に対する取水の特徴が分かるからである。

二ヶ領用水の取水路

江戸時代、多摩川初の官営灌漑用水路が二ヶ領用水である。当時、相模の一部の平地は武蔵野の延長とも考えられていた。堰は上下二つ、下流堰（宿河原 1629 年）と上流堰（上河原 1611 年）で多摩川右岸の稲毛、川崎の水田を潤していた。堰は石垣や蛇籠（竹籠に石を積めたもの）で簡単なものが、現在は大がかりな取水施設（写真3、写真4）となっている。水路網は川崎市（一部横浜市）に広がっている。

写真4は上流の上河原堰取水口で、チェーン手前水路が現在の用水路入口である。二つの堰からの用水路は、いずれも沖積平野の水田灌漑水路で、取水後、直ちに灌漑域に入る。もっとも代表的な水田灌漑のための取水方式である。



写真3 下流の宿河原堰



写真4 上流の上河原堰

六郷用水の取水路

二ヶ領用水、上下2堰の間、多摩川左岸に武蔵野台地につながる狛江市がある。ここから六郷、羽田の水田灌漑のための六郷用水（1609年狛江市史）が取水されていた（写真6）。今も狛江水神前に六郷用水の取り入れ口の遺跡である石垣が残っている（写真5）。水路は、取水後に多摩川から離れ、東進し約3km先の河川に合流し、台地に沿うハケ＝丸子川（別名：次大夫堀、または六郷用水、）になる。取水口から丸子川に至る水路は、現在は埋め立てられ、道路（福祉通り）となった。多摩川からの取水点である狛江水神は河口から20km以上の上流にある。六郷・羽田の水田灌漑としては、あまりにも上流過ぎる。工事費も嵩む。下流の丸子橋上流あたりからでも用水としては、十分な水質があり問題はないはずだ。上流に設けたのは別の理由からかも知れない。一つには、水質を高める目的と言える。二つには周辺灌漑面積も増加する。さらにもう一つは台地への灌漑を目的にしたのではとも考えられる。以上の目的を叶えようと計画されたのがこの六郷用水ではなか

ろうか。この工事には約 15 年もかかり、様々な困難があったとされる。用水の流れは、やや複雑である。六郷用水名が丸子川、次大夫堀などの名前のあることも、混乱を象徴しているようだ。



写真 5-1 六郷用水取入れ口



写真 5-2 取入れ口の絵

六郷用水は多摩川水神前（写真 6）から取水された後、段丘や台地を通過して野川、仙川に合流し、仙川水神橋で丸子川（次大夫堀）に接続される。その後も谷戸川が流入している。このように水路は途中に多くの河川水を合流させているので、水質を重視した水路とは考えにくい。また当時の世田谷領地は現在の丸子橋あたりまで及んでいたが、用水からの灌漑面積は約 100ha（次大夫堀公園資料）で全体の 1500ha から見れば僅少であり、灌漑面積増大のためとも言いにくい。



写真 6 六郷用水（丸子川） 次大夫堀公園内資料館（世田谷）

(原図に現在の地名などを書き加えた)

取水点から六郷用水のルート全体を見ると、どうも水質よりも台地への導入を考えたのではないと思われる。

地勢や、取水点、周辺水田への灌漑領域などから見て、次のような推論が出来る。多摩川から台地へのルートが何らかの理由で、例えば当時の測量技術の精度では果たせず、台地への誘導ができなかったとも思われるのである。

ところで、取水路を見ると取水後、水路は直ちに多摩川から離れている。これは、ニヶ領用水との平地型灌漑方式と同じである。



丸子橋近くにある多摩川台公園から多摩川を見渡すことが出来る。朝日に輝く富士、夕焼けが美しいという。一見に値する（第1話表紙写真）。



写真6-補 次大夫堀公園内資料館近くにある測量の壁画

写真6-補は現代画であるが、当時の傾斜地での水盛測量（水準測量）の様子がよく描かれている。観測官は「水盛」、助手は標尺を持っている。水盛容器には水に浮いた浮標がある。観測官は台車上で「水盛」を水平に保ち、助手は遠くから「水盛」を水平に見通し、保持している標尺を読む。この絵は観測に先立ち、測線が正しいかどうかを確認しているように見える。



次回 かなしい坂 失敗した台地への引き込み水路（府中市）